有根

発行
書道研究 有根会

発刊に寄せて

会長　松下　英風

この度、有根会会報「有根」を発刊することができたこと大変嬉しく思います。

主宰松下芝堂が逝去してから、「書道研究有根会」と改め役員を一新し、現在に至ります。

その間には様々なことがありました。

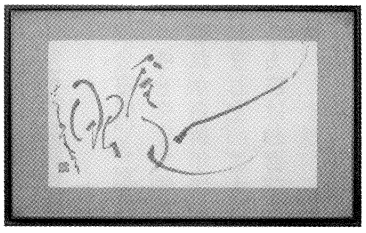
有根会書展につきましては、待望の愛知県美術館での開催は、会員一同大いに盛り上がり、会の発展を示唆するものと感じてやみません。

これからは、会の結束はもとより、会員の増強、技術の向上など、発展するためにも新企画を取り入れ、失敗を恐れず、全てを糧として、皆さんと一緒により良い会にしていきたいと思っています。

そして、この会報もまた、会員の士気を高めるものとなることを信じてます。

最後に、この創刊にあたり尽力を頂いた方々には大変感謝しています。

ありがとう。



41回「一隻眼」（遺作）

有根会書展

・第四十一回　平成二十三年六月二十一日～二十六日
　電気文化会館ギャラリー
・第四十二回　平成二十三年十二月二十七日
　平成二十四年一月四日～九日
　愛知県美術館ギャラリー八階J室

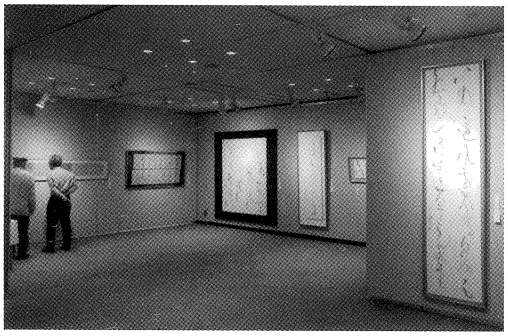
第四十一回 有根会書展を終えて

亀山　富美

師が旅立ち、はや二年余の歳月が過ぎた。

平成二十三年六月、有根会書展は、例年の如く無事開催された。今回は、実力のある関東地区の方々が抜けた穴を心配していたが、全くの危惧に終った。それと言うのは、今年度、四月二十九日の有根会総会の後、初めて書展の為の研究会を持った事で、会長以下、役員の先生方で誤字脱字の無きよう、又作品のレベルアップも念じて、豊川稲荷の大広間に各々の作品を全部畳の上に敷き並べ、たくさんの方の目で確かめ合う過程があって、今回の出品に至った訳である。

今迄あまり出品できなかった横ものも多く出品され、三尺×八尺の大作の横額も陳列された。壁面は、ゆったりかまえる事が出来、会場は明るくて空気が澄んでいる様に感じた。時が流れる様に、皆さんの作品は自然な流れの中で、新しい風が吹いてきたかの如く、内容が個性的に変わりつつあって、将来の展望が少しずつ拓けたかに思える。



芝堂先生の半切 1/2、扁額「一隻眼」は、さすがの迫力で心にせまってくる。又小品の色紙は金箔の扇面に茶瓶が、かるいタッチで、ユーモラスに書かれ、師のにこやかな顔を見ゆる如きであった。会長賞の亀畑明曠氏、心をうつなにかを持っている力作、受賞者の皆さんは、それぞれすばらしい所を認められてのこと、今後、奢ることなく益々の精進を祈りたい。そして、新星・有根会は三神栄軒常任顧問、松下英風会長の下、全員が心をひとつにして歩んでゆく事を熱望してやまない。

第四十一回有根会書展

芝堂大賞　亀畑　明曠
芝堂準大賞　秋田　桃泉
　　川松　杷泉
　　杉浦　仁美
中日賞　松下　三雪
　　加藤　香雪
　　西川　佳江
　　温井千恵子
　　橋口たず子
　　山口　房子
東海テレビ賞　小林　雅子
　　日高　翠竹
　　渡部　春泉

第四十一回有根会書展で芝堂大賞を受賞して

亀畑　明曠

長らく有根会書展に出品せず、昨年（四十回記念展）、三十五年振りに出品したところ、思いもかけぬ「記念賞」を頂き、これだけでも身に余る光栄と存じておりましたところ、今回又「芝堂大賞」を受賞し、感激と身の引き締まる思いで御座居ます。今日こうして書に向き合える事が出来るのも、偏に今は亡き、松下芝堂先生の厳しくも温かく御指導して下さったお陰で、有難く思っております。又私の我儘で好き勝手を黙って見て下さっていた先生、何と御礼を申し上げて良いやら、この御恩に報いるには、新星・有根会を力強く発展させる事ではないかと思い、会長・松下英風先生、常任顧問・三神栄軒先生、亀山富寿先生御指導の下、微力ながら私も会員の一員として皆様方と共に尽力せねばと思っております。

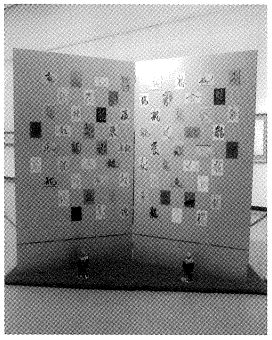
最後になりましたが、どうかこれからも諸先生方の変らぬ御指導をお願い申し上げます。

第四十二回 有根会書展を終えて

古川　芝芳

有根会書展、二十八回公募展が、所を変えて愛知県美術館で暮れから新年にかけて開催されました。ご入選、入賞された方にはお喜びを申し上げます。

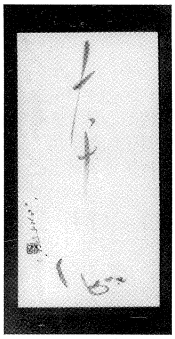
一月四日はとても寒い日でした。朝、係の方により会場の扉が開けられました。「龍・竜・辰」が五十・六十と乱舞して入場する者を待ち受けており、どう通り抜けようかと一瞬戸惑いを感じましたが何とか奥へ進むと、そこには、有根会を設立された松下芝堂先生の「本心」が皆に微笑みかけるように、ご来場の方を迎えておりました。



今回の公募展では紙面が限定されましたが、その中で軽やかに重厚に縦に横にと各自が工夫・研鑽した姿がうかがえて素晴しい作品ばかりでした。

会員・役員の作品には大作が多くて、見ていただいた方には活気と前向きな姿勢を感じていただけたと思います。

懇話会では先輩より、もっと、もっと勉強せよとのお言葉をいただき、会員一同、日々努力をし、新しい風をも入れて有根会が一層発展する出発点となることでしょう。



42回「本心」（遺作）

最後になりましたが、昨年三月、東日本大震災に遭遇されました方には、一日も早く元の生活を取り戻されることを願っております。

第四十二回有根会書展

芝堂準大賞　落合　玉泉
黒野　芝香
林　翠葉
日景　洋子
村上　雪山
阿知波江泉

中日賞　大岡　祥園
酒田　叡翠
西脇　昭子
堀田　廣泉

東海テレビ賞　田中　緑泉
藤井　秀堂
山室　栄美

第四十二回有根会書道展で受賞にあたり

黒野　芝香

この度、有根会展がお正月の時期となり待望の芸術センターでの開催となりました。

書道研究有根会として新しく踏み出す一歩になり作品づくりにも皆の意気込みがありました。先生方の作品にも学ぶ作品も多く県美一回目にふさわしい書展でよかったです。

その中で五人に準大賞が頂けました。私も今更受賞と、とても気はずかしい思いです。先生方に感謝致します。作品は詩が気に入り、書いて「もう時間切れ…。あと少し書いてみるか。」という気の入れ方で出来、不出来が決りますね。でもやはり一番は、翠軒先生、松下先生が言われていたように、「書いて〳〵書きまくれ。」です。すぐに忘れてしまいます。言い訳ばかりいう自分に今一度言いきかせねばなりません。また古典臨書勉強もおろそかになってます。もう少し苦しみながら書いて〳〵を楽しみ続けたいと思います。これからもよろしくお願い致します。

祝賀会

第二十八回読売書法展審査員
会長　松下　英風　先生
副会長　古川　昇史　先生

読売書法展祝賀会にて

藤村　真徳

第二十八回読売書法展の有根会祝賀懇親会（読売書法会幹事・評議員会主催）が、龍園本店（名古屋栄、ＮＨＫ名古屋放送センター東隣）で、去年も八月二十八日、入賞、入選者・理事の先生方をご招待して催されました。

芝堂先生お気に入りの場所での恒例の会、気づくと、今でも先生が何時もの席で酒を片手に「頑張れよ。」って微笑んでいるようなそんな場所。

和やかな雰囲気の中、松下英風会長より入賞、入選者にお祝いのお言葉と花束贈呈。更に、審査報告を兼ねて会長より一言頂き、そして、代表による謝辞へと祝賀は進み、いよいよ乾杯。今回もお祝いの気持ちを込めて料理にはこだわりました。鱶鰭スープ・北京ダックなど豪華ラインナップでお送りしました。

有根会に集まった方々の笑顔一杯の写真撮影・楽しい会食。お酒も少々入って口も軽くなって、みんな和になって楽しく時は過ぎて行きました。

名残は尽きないのですがどうしても閉会です。最後に有根会常任顧問三神栄軒先生より後輩達へ励ましの一言を頂き幕となりました。

読売新聞社賞　畑　裕子
読売俊英賞　永谷　恵子

読売新聞社賞を受賞して

畑　裕子

この度は、大きな読売新聞社賞を頂きまして、この上なく光栄に存じております。

英風先生を初め、いつも温かくご指導を頂いている有根会の諸先生方のお陰と心より感謝申し上げております。

「書は心画なり」と申します。人生経験を豊かにするよう努力し、その時々の品徳を書作品に反映することができたらどんなに素晴らしいことかと思います。

微力で生意気のようですが、それが何より有根会に貢献することだと信じております。

今後とも宜しくご指導をお願い申し上げます。

東京会場にて

同好会

墓参と遺作拝見

庄田　翠苑

平成二十三年五月二十一日、芝堂先生のお墓参りと遺作拝見を兼ねて、希望者二十一名前芝西福寺と前芝神明社を訪れました。

墓前に花を手向け、お参りをすると、

「皆、元気でやっとるか」

おっしゃられているようで、また自ずと頭が下がります。

本堂で参拝の後、書院に通された私たちは、先生の「書」の数々を拝見。作品の前に立つと、いつもの感動が甦り、新鮮な気持ちになります。この感激は、先生の書かれている時の姿が思い出され、懐かしさすら憶えて、

「先生、会いに来ましたよ」

と思わず言葉になります。

拝見していると、その場を離れ難いが、この感動だけは何時までも忘れないでおこうと思いました。そして、又いつの日か先生の作品に会いに来ようと心に決め、次の拝見場所へ。

前芝神明社では総代さんや係りの方々が、拝殿の扉を開いて待っていて下さいました。この神社には、芝堂先生の筆に成る『前芝神明社』の板額と、昭和三十年、日展に初入選された時のお作が奉納されています。それは晩年の作とは違い、若々しさの中にも重厚さの窺える、半世紀以上も前のお作品で、先生の「これから！」という希望に満ちた血肉のあふれる意気込みが、作品から伝わってきます。

板額奉納時に境内に植えられた記念樹が、すっかり根付き、枝葉を大きく伸ばしていました。

寺社で遺作を拝見し終えた私たちは、前芝の海岸を歩き、丁度、時期でもあるあさり三昧に舌鼓を打ち、恩師を懐かしみました。

汐風の下、忘れ難い三回忌の墓参でした。

有根今昔

東有根会創設時の群像

大野　昭子

東三河在住の長谷川悟石、高瀬漁舟、神藤章雲、奥田渓水、飯田柏亭、古川豊渓、岩原石瀾の諸先生が、日展特選を二回受賞していた松下芝堂先生を招いて「古典研究会」の名のもとに研修を始めた。二、三歳の差こそあれ全員が三十代前半で、情熱あふれる書芸群像であった。この中に長谷川悟石門下で二十代の中

西春琴とまだ十代の大学生であった私も参加していた。あれからすでに半世紀の歳月が流れた。

研究会は鈴木大善師の尼寺法香院宿坊の奥座敷で行われ、床の間に、人形作家であられた芝堂先生のお父君の鏡獅子が飾られていた光景は今も鮮やかに思い出される。

文学、芸術、学問等いずれの分野においても、三十代の人物像は未だ風格など程遠いものであるが、顧みれば添削中の芝堂先生のご様子には、どこか味のある、一種の風貌が既に漂っていた。

研究会の後の食事会での様子など、思わず頬の緩む思い出も少なくない。

東有根会創設の頃の人脈は、まことに生気あふれ、書の奥義を目指してどこまでも進もうとする若き群像であった。

一宮中日文化センターの思い出

山田　千鶴

一宮文化センター松下教室は昭和四十四年十月に開講されました。私は昭和五十二年に入門しました。当時お教室は満席でした。最初に驚いたのは、半紙に「九成」の手本を書いて頂きましたが、何の折り目もない所に書かれたのに、一分の狂いもない程に収まり、とても感動した事を覚えております。以前は津島神社参集所にて錬成をしておりましたが昭和五十五年津島錬成館ができ、私はそちらへ参加させていただきました。

三百畳程の広い部屋でのおけいこ風景は壮観でした。

それから先生が逝去されるまで、数えきれない程の教えを頂き、今更ながらとても偉大な先生に出会えた事を感謝致しております。書に関してはとても厳しく、最初の作品の手本を頂いた時には「千枚練習してから持って来い」と仰られ、本当に千枚書いて持って行った事。又、半紙でも余り練習をしてない時に添削をお願いすると無言で返された事など、なつかしく思い出されます。でもその厳しい教えのお陰で今があるのだと、つくづく思います。最近は作品展に出品する時、出来るだけ多く練習したつもりでも、やはり練習不足のため作品を見るとがっかりします。初心に帰り、体の続く限り先生の教えがほんの少しでも出せる作品を目指して、頑張りたいと思います。

翠香先生・芝堂先生の思い出

加藤　翠林

有根会の会報が、発刊されます事を心からお祝い申し上げます。

翠香先生（矢舟先生のお母様）の所へ二人の子供がお世話になり、その中に私も稽古を始めました。とても温か味のある先生でした。その当時先生は、芝堂先生の門下生でした。錬成会に行かれた時の事を笑顔でよく話して下さいました。今思いますと、先生にとって一番充実していた時期だった様です。

半切の作品のご指導を受けながら、挙母神社の拝殿にて発表させて頂いた事もあります。書く事に興味が出始めた頃、突然翠香先生がお亡くなりになり、悲しみで一杯でした。が、昭和五十二年には、翠谷先生（矢舟先生のお父様）のご尽力により芝堂先生にお世話になり有根会支部として豊根会を結成し同年九月第一回豊根会書展（四十名）開催しました。そして、大勢の仲間が有根会にも入会致しました。芝堂先生との出会いはここから始まりました。

稽古場所は矢舟先生のお宅で、夜遅くまで教えて頂きました。先生も大変だったと思いますが私達も頑張りました。豊田書道連盟にも講師としてお招きし、良寛様の話などをお聞きしました。次第に外との関わりが出来、何をするにも無我夢中でした。家族の協力もあり、私はここまで来られました。

芝堂先生が永眠されて早や三年、毎年お墓参りをさせて頂いておりますが、その折には前芝神明社にも足を運び、奉納されている日展初入選の作品を拝見してその度に輝きを増しそこに居る事に幸せを感じ、勇気を頂いて帰るのです。

遅いかも知れませんが、今私は千字文の楷・行・草と手紙文の練習をしています。古典の勉強は奥が深いです。私にとって永遠の課題です。今迄、色々な形で私達に慈愛の眼でご指導して下さった、亡き芝堂先生に感謝しながら、有根会が益々前進します様、少しでも協力したいと思っております。

翠軒先生・松下先生の訓

一歩前進して、五彩の美を見せようとするものは、「有」である。俗である。別に見せようとはせず、一歩後退して五彩の美をなすものは無である。有には余韻というものは無い。無には余韻というものがある。尚、無には余情というもの、韻致というもの、風韻風趣というものが流れている。内から湧き出ている。ただよっている。押え切れない高さと品位とを静かに見せている。それはそれとして、落ちつきというものがある。磐石のような落ちつきというものがある。あたふたとしないで、作者は誰でもこの無を自らの心の内に修めなければならぬ。無で進めばいくらでもウマクなる。徒らに筆先ばかりの「あや」の「とりこ」となってはならぬ。特に近ごろのように、けたたましく筆先ばかり「文」「うごき」にのみはせ参じては、おぼれてい

ては真の芸術にはい左様ならを手っとり早く打出す外はあるまいな。人間生活も大体これと同じだ。

（春風　南平台マンションに入るの日述）

松下芝堂先生へのインタビューの中から

○用筆法

それだけでいつも苦労するみたいですね。一ぱつでピチッと筆が入るというのが難しい。筆の芯がピシッとはまった時は、脳天に伝わってくるものが全く違います。書いている途中で、アッこれは出来るぞと感じとれる。そういうものでないと納得出来ないですね。

側筆は嫌いですから、常に一本の命毛が中心を通るように、全体の毛があとからつくように心掛けているんですが、筆の角度はやや斜（はす）に構える、ちょっと側面から入れるとあやが出来る。その中心を一本の毛がスーッと通る。そこに何とも言えない味わいの線が出てくる。あまり力を入れすぎてもいけない。力を入れると逆に墨量をはじき返される。その兼ね合い、気合が難しい。

○連綿について

単体のものを三十年も四十年もやっている人は少なくなって、今は最初から連綿をやらされたりしますけど、若いうちにちゃんとした単体をガッチリ体に取り入れておかないと粗雑なものしか書けなくなる。むしろ一字一字切れてる方が流れがあり、より大きい流れが出来る。今はそうでないと受けないのか、筆を無理して動かす人が多くなった。それともう一つは、筆が軽く流れすぎてる作品が目立つということでしょうね。もっと落ちついてくるといいと思いますけど、やはり世の中実がなくなっているからでしょうかね。

○三十帖策子と灌頂記

同じ空海のものでも三十帖策子は気楽に取り組める。ところが灌頂記となるとそうはいかない。半紙に五十枚でも臨書しようものならくたくたに疲れてしまいます。何というか、エネルギーのかたまりみたいなもので、字は生きものだなあという感じがしますね。

三十帖策子は、その点、何ともいえず身軽な姿をしている。肩の力を抜いてあるというか、地上三寸位のところですっと立っているといった感じ、名人が水の上を歩くといいますか、歩いても音がしないといったような印象を受けますね。

（「墨」からの抜粋）

社中展

第二十回 豊根会記念書展を終えて

中根　翠栄

豊田文化協会書道部の中に翠進会があり、加藤翠香先生のご指導の下（もと）に、活動しておりましたが、翠香先生のご逝去に伴い、芝堂先生にご指示を仰ぐこととなりました。芝堂先生は翠軒流の最高指導者であり、日展審査員をしておられました。先生の温かいご指導を受ける事が出来たこと、本当に嬉しく、感謝して書道に励む事が出来ました。しかし、先生のご逝去は誠に残念でありました。

豊根会書展も回を重ねること三十回、松下英風先生のご指導の下、平成二十三年五月、三十回記念展を開催することが出来ました。会員は十名と、少なくなりましたが、皆さんの頑張りで、三十点を展示することが出来ました。

今回は記念展のため、特に、色紙大のガラスに好きな言葉を彫った「書刻」を十点展示し、好評を得ることが出来ました。

記念展に際しては、上司・諸先生のご指導、ご清覧を賜り厚く御礼申し上げます。

平成23年5月6日～8日

柔らかに表現
豊根会が書展
豊田で30回記念

第三十回記念豊根会書展（中日新聞社後援）が八日まで、豊田市小坂町の市民文化会館で開かれている。元日展参事の故松下芝堂さん（中日文化賞受賞者）と、長男で日展会友の松下英風さんに指導を受けた市内の書道愛好家十人が三十点を展示している。

豊根会は墨を使って、柔らかい字体で漢詩いろは歌などを表現するのが特徴。三十回を記念して、色紙大のガラスに好きな言葉を彫った「書刻」も並ぶ。

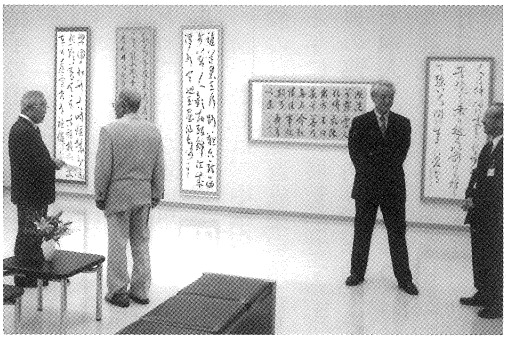
（お知らせ）東日本大震災の災害義援金を豊田支局でも受け付けています。平日午前十時～午後六時に持参ください。多量の現金は両替を お願いします。

第四回雙根会書展を終えて

加藤　矢舟

第四回雙根会（そうこんかい）書展を平成二十三年十月二十一日～二十三日、豊田市民文化会館にて開催した。今回は十九名の会員で出品点数は三十六点であった。特別出品として師（松下芝堂先生）の遺作「真言」も陳列させて頂いた。私は半切1/2横作品「無心是道」を出品した。この作品は師である芝堂先生の教え「無心に自然体で書く」を念頭にして一気に書き上げた。また、全紙横作品の臨董其昌「月賦」も加え二点とした。

会員の主な作風は淡墨による漢詩の行草体が主流である



が、調和体「人は仲間に支えられ歩むことで苦境を乗り越え以前にも増して強い人間に生まれ変わる」と東日本大震災の被災地へ向けた励ましの言葉を題材にした作品も親しみやすく好評であった。この他、王羲之、王献之や懐素、空海や藤原行成などの古典の臨書作品も八点ほど展示した。

三日間の書展開催中、豊田市長の鈴木公平様、教育委員会教育長の笠井保弘様をはじめ多くの来賓の方々にもお越し頂き、五百三十名の参観があり、盛会裏に終えることができた。

次回は五周年の記念展となり、平成二十四年七月六日～八日に会員展と併せて母親（加藤翠香三十七回忌）の遺墨展を予定している。

（有根会理事長・雙根会主宰）

'12豊渓会書展を終えて

落合　玉泉

平成二十四年一月二十四日から二十九日まで、豊川稲荷から徒歩十分のところにある桜ケ丘ミュージアムにて、豊渓会書展を開催いたしました。幼児から八十代までの出品者八十名が一堂に自信作一八〇点を披露しました。

中でも、初の試みとして、好きな言葉を色とりどりの料紙や和紙に書いて扇子に仕上げ、三枚の大きなパネルに「松」のイメージで扇子を散らした美しい合同作品は、多くの来場者の目を惹きました。

お越しになったお客様から、「作品が楽しそう」「淡墨っていいわね」「孫を習わせたいわ」などのお言葉を頂戴し、只々うれしい限りで書をやっていてよかったと改めて再確認いたしました。また、今回「日本の書展」の出品記念に制作したガラス書刻の文鎮を会場に飾ったところ、想像以上の反響で驚きました。

今年は延べ一二〇〇名という多くの方にご来場いただき、なごやかな雰囲気の中、無事に展覧会を終えることができました。来年はどんなサプライズが飛び出すのやら、今からワクワクしています。

清心会の活動について

遠山　翔雅

例年、私達の清心会は、年明けに条幅展、うぐいすが鳴き始める頃に、あすなろ書初公募展、清心書展を開催しています。

『清心会』、月刊書道誌『あすなろ』は、共に祖父の暁雲が設立し、父の翔雲、そして私達と受け継がれ現在にいたります。

清心会条幅展は、学生の条幅作品を展覧します。今年で第四十九回になりますが「おばあちゃんが暁雲先生に習いました」、「お母さんも大きな字を書いたよ」と、条幅講習会に笑顔で参加する子どもたち。代々書道を続けてくださる姿を見ると、こちらも襟を正す思いです。

あすなろ書初公募展とは、あすなろ社が公募し、幼年から高校生を対象としています。毎年、各先生の熱心な御指導の下で御稽古をされている生徒さんの力作が、数多く集まります。その中から秀作賞以上の作品は、瀬戸市文化センターで展覧します。

どの作品も、若さいっぱいをかもし出し、躍動感にあふれた瑞々しい仕上がりになっています。

また、公募展の最終日に行われる授賞式では、愛知県をはじめ、県外からも毎年大勢の先生、生徒さんに御出席いただいており、遠路はるばる足を運んでいただけることを本当に感謝しています。

授賞式で、来賓や御父兄の拍手の中、うれしそうに賞状を受け取る子どもたちの姿を見ていますと、私自身も喜びを感じると共に、その子にとって大切な思い出になるだろうと思います。

清心書展は、中学生から一般の日頃の練習成果を発表する年に一度の展覧会です。古典の臨書、仮名等。作品を書く本人、観る人が楽しめる様な展覧会にすることを目標にしています。

今後も会員一同力を合わせ、共に成長できたらと願っています。

あとがき

「有根」第一号をお届けいたします。

心よく原稿をお寄せ下さいました先生方、ありがとうございました。

御希望に添えなかったところ多多あると思いますが、有根会が、皆様相集いてますます幽玄の世界を楽しみながら歩んで行けたらと、願い編集させていただきました。

これからもよろしくお願いいたします。

（庄田）